

授業談話データベースによる実態調査

－文末形式の「中性化」の様相－

小林 美恵子

1. はじめに

日本語の話しことばには男性・女性特有の表現形式があり、男女がそれぞれに、その形式を用いることが多いという前提の上に「女性的な表現」「男性的な表現」のイメージが存在してきた。これらは、自称・対称詞、感動詞などの語彙や、丁寧体使用など文体の差異とともに、文末形式の差異にも現れる。終助詞「わ」「の」「かしら」や、判定詞（助動詞）「だ」の不使用などは女性的表現であり、「ぞ」「ぜ」「か（い）」や「だ」を使用する形式は男性的表現とされる。

しかし、このような男女に特有な形式、中でも「女性的」とされる文末形式については、若年層の女性を中心にほとんど使われなくなり、また、女性が従来「男性的」とされた形式を使うこともあるなど、男女のことばの差がなくなっているとも言われる。このような報告が散見されるようになるのは、おおむね90年代からのことである（三井1992、小林1993、尾崎1997、中島1997、小川2004、水本2005など）。また、遠藤（2002：45）は職場の男性が「あら」（感動詞）、「のよ」「わ」など従来女性専用とされた形式を使用する例がある一方、「ぞ」「ぜ」など男性専用とされた形式の使用が減っていると報告している。つまり、これらの報告によれば、文末形式においては男女双方からことばが近づき「中性化」しつつあるということになる。

小論では、高校・中学の授業の録音を文字化した資料により、教師の談話の文末に男性的形式、女性的形式がどのように現れているかを観察する。ついで、それらの形式が「中性化」している可能性について考察する。最終的には「中性化」していない女性的・男性的な表現が存在している可能性もあり、また従来男性的とされた形式が中性化して両性に用いられたり、その逆も考えられるだろう。それらについて、授業という言語活動においてどのような

意味をもつのかを含め考えてみたい。なお、自称・対称詞の使用とジェンダーについては小林(2008a)、丁寧体の使用とジェンダーについては小林(2007)ですでに言及したところであり、小論では文末形式を考察の対象とする。

小論で考察の対象とした授業の談話データベースは、2007年度日本学術振興会科研費補助金の助成を受け、2006年10月～2007年6月にかけて、首都圏の中学・高校教師30名に依頼して各1単位時間(45～50分)の授業を録音、文字化したものである。協力者は20代から60代の男性16名、女性14名の計30名。授業時間はのべ46時間53分。データ化した発話総数は18,531レコードうち教師発話14,248レコード⁽¹⁾(女性6,132 男性8,116)であった。調査の概要については小林(2007・2008b)に記した。

2. 文末形式の実態

2.1 分類の方法と問題点

まず、男女それぞれの全教師の発話データをそれぞれのレコードの末尾(文末)の形式に従って以下のとおりに分類した。ただし、レコードの中には発話の後に笑い声などの注記があるものもあり、「はい」「ええ」「ね」などを完結した前文にややポーズを置き、引き続き発話しているもの、また完全に倒置的な文として発話されているものもある。データ上ではこれらをいずれも1レコードとして処理してあるので、レコードの末尾に現れたものでなくても、句点で区切られた実質的な文の終わりをもって文末とする。

- ① 丁寧体中性形式＝丁寧体言い切りおよび丁寧体に「ね」「よ」「けど」「から」などの終助詞や終助詞的な働きをする接続助詞などがついたもの(疑問形・依頼形を含む)

です・ます・でしょう・ましょう・ません・ください・なさい・ですね・
ですよ・ますけど・ますから・ましょうね・ませんか など

- ② 普通体中性形式＝体言・普通体言い切りおよび普通体に「けど」「から」など、とくにジェンダー的な意味を含まないと考えられる接続助詞などがついて終わっているもの(言い切りの疑問形、助詞「て」で終わる依頼形

を含む)

[名字]さん・行く・行く?・行って・行きたい・行こう・行けば・高い・高い? など

- ③ 女性的表現＝原則として普通体、女性文末形式を含むもの・女性文末形式を含まないが女性的表現であることを感じさせるもの(使用語彙、丁寧度、縮約の有無、引用の文末形式などによる)
- ④ 男性表現形式＝普通体、男性文末形式を含むもの・男性文末形式を含まないが男性的表現であることを感じさせるもの(使用語彙、丁寧度、縮約の有無、引用の文末形式などによる) これは水本・福盛・高田(2009)によって「女性文末詞不使用形」と分類されたものを基本とし、男性専用とされてきた形式をあわせるなど一部改変した。

これらが、男性教師、女性教師それぞれの発話にどのように現れるかを見ていくわけである。男性文末形式、女性文末形式の判断については益岡・田窪(1989) マグロイン花岡(1993) 鈴木(1993) 尾崎(1997) 小川(2004) 水本(2005)などの先行研究にあげられている形式を網羅するようにし、依頼表現については中島(1997)の分類に従った。さらに一部筆者の内観を加えて判定したものもある。

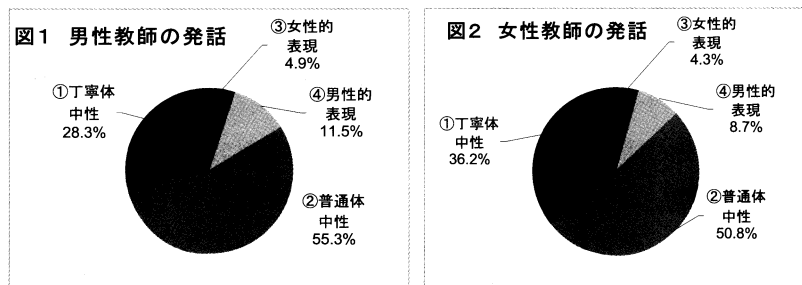
何をもって男性形式、女性形式とするかについては、難しい面もある。90年代以前の先行諸研究や国語辞典などは比較的単純に男性的、女性的と断じているが、それらの分類は記述者により必ずしも一致しているわけではない。小川(2004)では研究者・辞書等の定義、意識調査、実際の使用場面に現れる男女差をそれぞれ記述し、三者が一致しないことを指摘しているが、ことばが変化し、特に中性化していると言われる状況ではこのようなことがおこるのは当然であろう。その結果、例えば、かつては男性形式と考えられたものが、これに対する女性形式の衰退、すなわち男女の性を意識しない使用の普遍化により、中性的な形式となったと言えるようなものも存在する。⁽²⁾

2.1では、まずは従来女性的とされた形式を含むものを女性的表現③とし、それらを含まない、女性があまり使わない形式であるとされたものを含むも

のを男性的表現として④とした。これらは、いずれも文末形式だけでなく、それ以外の要素をも考慮して判定している。男性的表現のなかには、現状では中性的と判定されるべきものも含まれることになる。⁽³⁾ また、それ以外のどちらかの性に使用の偏る可能性のない（少ない）と考えられる表現を①②と分類することとした。①丁寧体については従来「丁寧な文体や固い表現では（ことばの男女差は）明確な区別はなくなる」（益岡・田窪1989:203）とされ、小林（2007:41-52）でも男女に丁寧体の使用頻度の差はあっても、使用する形式の差は見られなかったと言えるので、基本的に中性度の高い形式として他項と区別したのである。なお、女性形式・男性形式とされるものを網羅することにより③④は、実際に話者が女性的表現・男性的表現として意識して使用しているものよりは多くなる可能性があるが、その点についての考察と枠組みの修正については2.3で行うこととしたい。

2.2 男性・女性的表現の出現状況と文末形式

以下にあげる図1・図2は男性、女性それぞれに現れた①～④の発話の割合である。

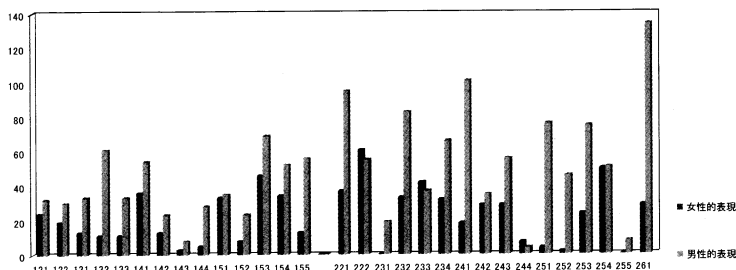


授業の発話では、女性的表現といわれるものが男女ともにおおむね4～5%程度現れていることがわかる。興味深いのは、女性よりも男性のほうに女性的表現の出現率が高いこと、また男性ではもちろん、女性においても女性的表現よりも男性的な表現が多く使われているということである。ただし、前述のとおりこの男性的表現のうちには中性的な表現と言ったほうがよいものも含まれている。この点から見て、男性が女性的な表現を使うという意味

でも、逆に女性が男性的、あるいは中性的な表現を使うという意味でも、両者の表現が近いものであることが察せられよう。

次にあげる図3は女性的表現、男性的表現の出現数をそれぞれ話者別に表したものである。横軸は各話者を示す番号だが、1桁目が性（女1、男2）2桁目が年代（2＝20代、3＝30代・・・）3桁目が話者ごとの識別番号となる。図の左半分（121～155）は女性を、右半分（221～261）は男性をそれぞれ年代順に並べてある。この図からは男性の男性的表現の使用が概して多いことが、まず読みとれる。また女性的表現を男性的表現よりも多く用いている女性話者は皆無だが、男性話者では222、233、244と年代を問わずこのような話者がおり、254も男性・女性的な表現がほぼ拮抗している。男性的表現に関しては男女ともにそれほど年代差はないように見られるが、女性的表現に関しては若い世代、50代以上の世代では比較的使われているのに40代ではやや落ち込んで少な目という特徴もあるようだ。

図3 話者ごとの男・女性的表現出現数（／45～50分）



さて、ここに現れた女性的表現、男性的表現とは具体的にはどのようなものか。③④の部分、すなわち、特に普通体の文末形式に着目して取り上げ、(表)にまとめた。表中の中性形式・男性形式は図1～3では、いわゆる女性不使用形式として、いずれも男性形式に分類してある。そのうち「な」「ぞ」「ぜ」などを中心として、おもに男性のみが使うことがある、またはよく使うと考えられる形式を男性形式として分類、女性にも比較的現れるものを、こ

(表) 男性・女性文末形式の出現状況 (話者性別による)

	女性形式	女	男	中性形式	女	男	男性形式	女	男
N・ナに接続	ね	71.5	166	だね	75.24	67	さ	0	29
	よ	29.04	19	だよ	59.4	63	だよな	0	5
	だわ	3.96	0	だ	21.12	36	だな	0	23
	だわよ	0	0				だぞ	1.32	1
	だわね	0	0				だぜ	0	2
	だわよね	0	0	だよね	95.04	54			
	なの	14.52	13	なんだ	7.92	9	なんだな	0	1
	なのよ	1.32	1	なんだよ	2.64	13	なんだよな	0	2
	なのね	7.92	10	なんだね	1.32	5	なんだぞ	0	0
	なのよね	0	0	なんだよね	11.88	16	なんだぜ	0	0
V・イAに接続	わ	7.92	0	(言い切り)	298.32	399	な(あ)	50.16	72
	わよ	0	0	(よ)	109.56	76	よな	0	10
	わね	1.32	0	(ね)	72.6	81	ぞ	1.32	15
	わよね	1.32	0	(よね)	99	71	ぜ	0	3
	の	31.68	43	んだ	14.52	24	んだな	0	13
	のよ	11.88	3	んだよ	22.44	59	んだよな	0	3
	のね	18.48	30	んだね	11.88	28	んだぞ	0	0
	のよね	0	1	んだよね	19.8	32	んだぜ	0	1
問いかけ	かしら	14.52	0	かな	142.56	111	か	104.28	119
				じゃない↑	19.8	23	かね	1.32	8
	の↑	56.76	47	(言い切り↑)	529.32	420	かい	7.92	9
	なの↑	10.56	4	(でしよ↑)	67.32	77	だろう↑	18.48	28
				(つけ)	42.24	63	だろうね	7.92	10
							だろうな	0	2
命令 依頼	てよ	9.24	13	て	88.44	102	命令形よ	1.32	3
	てね	21.12	24	なよ	3.96	4	命令形	6.6	11
				(なさい)	7.92	13	な	3.96	11
	合計	313.1	374	合計	1824.2	1846	合計	204.6	381

表中男性数字の縦線網掛けは女性形式のうち男性の使用が多いもの、女性数字の横線網掛けは中性・男性形式の中で女性が多く使用しているもの。全体にかけた濃淡の網掛けのうち、薄いほうは男女差が20%以内のもの、濃いほうは出現数が男女とのに0であるものを、それぞれ示している。

の表では中性形式として分けて記載した。なお、表中括弧でくくった「V・イA（言い切り）」「V・イA/よ」「V・イA/な」「V・イA/よね」「っけ」は図1・2では②に、「でしょ」「なさい」は図1・2では①にそれぞれ分類したものである。「よ」「な」「よね」は女性形式「わ」「わよ」「わね」「わよね」の「わ」が落ちたもの、「っけ」「でしょ」は一定量用いられる疑問の中性的形式として「かしら」や「だろう」に対置するもの、「なさい」については「～な」「～なよ」の丁寧形として、特に小林（2003:20）では職場の女性の発話調査で女性教師のみに見られたと報告したものであり、対比の資料として表に加えた。なお、本表では女性のデータについては実出現数ではなく、男性教師の全発話を母数として調整してある。すなわち女性発話数6,132に対する出現数を、仮に男性発話数8,116と同様の総発話数に対してならば幾つになるかということで計算した数値で表した。こうすることにより、数字どうしを単純に比較し、出現の量を測ることができると考えたのである。

図4 文末の男女形式

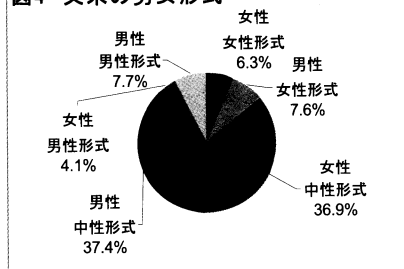


図5 女性形式の出現数

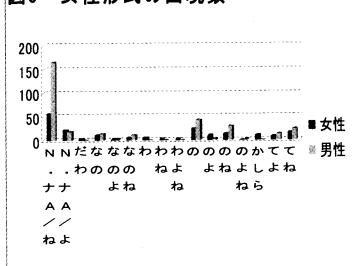


図4は（表）の、女性・男性によってそれぞれ使用された女性文末形式、中性文末形式、男性文末形式の総計を図示してある。図1・2では男性的、女性的とされる表現全体をまとめたのだが、ここでは文末形式のみを取り上げている。ここでも男性による女性形式使用が女性によるものよりも多いことが注目される。女性も男性的な形式を使っているがその使用数は比較的少なく、また女性形式の使用も男性よりは少ないので、相対的には女性のほうが中性的な表現が多くなっていると言える。男性のほうが文末形式に関しては女性的形式、男性的形式を多く使い、その意味ではバリエーションに富ん

だ表現をしていることになる。これは図3でも同じ傾向が見られたと言ってよい。

以下にここに現れた文末形式それぞれについて観察し、考察する。

2.3 観察と考察

〈男性がよく用いる女性文末形式・・・N・ナA/ね〉

（表）および図5に見るとおり、女性形式において名詞やナ形容詞（形容動詞）に接続する「ね」「なのね」（山ね・きれいね・山なのね・きれいなね）、動詞やイ形容詞（形容詞）に接続する「の」「のね」（行くの・高いの・行くのね・高いのね）、指示・依頼形式として、動詞連用形に接続する「てよ」「てね」（行ってよ・行ってね）については、女性よりもむしろ男性がよく使っている。特に総使用数の多い「N・ナA/ね」の場合男性の使用数は女性の倍以上で、女性もよく使うが、それ以上に男性によく使われていることがわかる。他のものも含め、男性が女性より多く用いている形式はおおむね総数も多い、すなわち使われることの多い形式であると言える。

なお、ある女性（男性）形式が脱性化しているかどうかを判断するためには、その形式が可能な文末で他にどのような形式がどのような割合で用いられているかという点も考えなくてはならない。本データの「N・ナA/ね」について言えば、これに対置する中性もしくは男性形式は「N・ナA/だね」である。この出現数を見ると、女性では僅差ではあるが「ね」より多く用いられ、男性では逆に「ね」の半分にも及ばない（「ね」166に対し「だね」67）ことがわかる。「だね」の使用数そのものも男性よりは女性のほうが多い。これらの点から「N・ナA/ね」「N・ナA/だね」が互いに従来その性が使われないとされた形式に乗り入れる形でともに脱性化、中性化していることが言えよう。

〈の・のね・なのね〉

前述のとおり「V・イA/の」「V・イA/のね」「N・ナAなのね」は本来は女性的文末形式とされたが、本データではいずれも男性のほうが多く使っ

ている。これに対置する中性・男性形式は「V・イA/んだ」「V・イA/んだね」「N・ナAなんだね」である。これらの使用数は女性よりは男性に多い傾向があり、やや男性的な形式とは言えるだろう。しかし、いずれの形式も使用数においては女性、男性ともに「V・イA/の」「V・イA/のね」「N・ナAなのね」には及ばない。つまり、女性はもちろん、男性もこれらの形式の使用については特に女性形式だからと避けることはなく、これらの形式自体が中性化していると言ってよい。因（2006:66）は小説・マンガ・エッセイなどの会話の分析により、男性が女性形式を使用することへの抵抗は強いようだと述べ、女性中性形式「そうねえ」「そこなのね」を男性が使用している例について「一歩踏み込んだ選択」だとしている。しかし本データでのこれらの語は、当たり前前の選択として用いられているようである。

〈よ・のよ・なのよ〉

「N・ナA/よ」（山よ・きれいよ）「V・イA/のよ」（行くのよ・高いのよ）は男性よりも女性の使用が多く、その意味では「ね」「のね」「なのね」に比べて脱性化していないが、男性はもちろん女性においても、これらに対置すると考えられる「N・ナA/だよ」「V・イA/んだよ」の使用が倍以上で圧倒的に多い。この「よ」は女性形式とは言えるが、女性も徐々に「だよ」形式を選び、また男性も「ね」のように乗り入れて用いることはせず「だよ」形式を用いるという形で、「N・ナA/だよ」「V・イA/んだよ」が中性化しているのである。「N・ナA/なのよ」（山なのよ・きれいななのよ）については出現数自体が男女ともに実数としては1例ずつしかない。これと直接対置する男性形式は「N・ナA/なんだよ」であるが、こちらは出現実数は15例、うち13例が男性によるものということで、中性化しているとは言えないだろう。そう考えると、この「よ」は未だ女性文末形式であり、中性化はしていないと見るべきかもしれない。すなわち「よ」を含むこれらの文末形式は女性的な傾向が強いと本データからは言えるのである。ちなみに「V・イA/よ」「V・イA/よね」は先行の分類では女性不使用形式（男性・中性形式）とされるが、本データではこれもむしろ男性よりは女性に多く用いられており、比較的女

性形式に傾いた中性形式と言ってよいように思われる。

〈女性文末形式…わ・かしら〉

本データの女性形式のうち、女性のみを使用されているのは「だわ」「わ」「わね」「わよね」「かしら」である。「だわよ」「だわね」「だわよね」「わよ」については1例も見られなかった。出現したもののうち「わよね」「わね」の実出現数は各1例ずつでどちらも同じ30代の国語教師によるもの。「だわ」2例はこれも同じ50代の国語教師によるものである。また「わ」は実出現数では7例あるがうち3例は関西出身者によって発話された、方言系のもの（「もう、これは問題のとおりやわ（151-308）⁽⁴⁾」など）で、これを除くと4例のみ、それぞれ別の話者によって用いられている。「かしら」は11例で比較的多いが、これも20代1人と50代3人の4人のみの発話である。

これらの形式が用いられるような状況で他の形式を選ぶとするならば「だわ」に関しては「だ」「だよ」「だな」など、「わ」「わね」「わよね」に関しては「V・イA（言い切り）」やこれに「よ」「ね」「よね」「な」などのついた形、「かしら」については「かな」「か」などになると考えられるが、いずれの形式も女性形式の使用数に比べて男女ともに圧倒的多数用いられており、この点からも女性による女性形式はごく限られた範囲でしか用いられていないことがわかる。また実際には出現していない「だわよね」に対置する「だよね」と、「V・イA/よ」「V・イA/よね」「かな」については女性の出現率のほうが男性よりも高いことが（表）からは明らかで、これらが男性形式というよりは女性によく使われる中性的な形式となっていることも窺われる。「V・イA/ね」「V・イA/な・なあ」については未だ男性の使用が女性よりは多いが、女性の「わ」系の終助詞に比較すれば圧倒的多数女性にも使用されており、これはどちらかと言えば男性によく使われる中性的な形式と言うことができよう。

ちなみに因（2006:69）は、女性の「女言葉」使用が伝統的な女性像への順応を示しているとは限らず攻撃的な姿勢のラベル（攻撃の鎧）になる可能性がある」と述べているが、本データにおいて特にそのような傾向は見られない

ようだ。これは、談話の相手が「鑑」をまとして防御しなくてはならない関係ではないこと、一連の談話の流れの中で、普通体中性的表現、丁寧表現、あるいは男性的表現に交えてこのような表現が現れており、いわゆる「女性文体」の談話が存在しないことによると考えられる⁽⁵⁾。

〈問いかけ…の↑・なの↑・「言い切り↑」・か〉

疑問、反語、相手に特に返事を求めるというわけではなく自問自答的に使った疑問表現などをまとめて「問いかけ」とする。「かしら」「かな」についてはすでに述べたが、女性形式と言えるものとしては「V・イA/の↑（↑は上昇アクセントを示す）」「N・ナA/なの↑」があるが、「の↑」については男性もよく使っており、すでに女性形式とは言えないだろう。また「かな」や、男性形式に分類した「か」（ともにアクセントとしては上昇、下降を含む。これは「かしら」についても同様である）も男女ともに多く使用しているが、「かな」のほうが「か」よりは、やや女性の使用に傾いている。しかし、「か」も男女の使用差は20%以内⁽⁶⁾（88%）なので、ほぼ中性形式と言ってよいと考えられる。なお、このような問いかけの形式として、圧倒的に多く用いられているのは、疑問の終助詞を用いない「山↑」「行く↑」「行った↑」「高い↑」「きれい↑」のようなものである。このような疑問形式は男性にも女性にも、ジェンダー的な意識とは無縁に使われていると言ってよいだろう。

また、男性形式である「かね」「かい」「だろう↑」を含む疑問形式が男性ほどの数ではないが、女性にも用いられているのは本データの特徴である。ただし、「かね」「かい」は女性では50代の1話者のみの使用であり、この話者のいわば癖というか特徴的な使用であり、一般的にはやはり男性的文末形式と言ってよいだろう。男性においては多年代にわたる10人の話者によって用いられている。「だろう↑」「だろうね」の使用は女性にもあり中性化が感じられるが、「だろう」に對置する「でしょ↑」という形（「でしょう」という丁寧体由来ゆえに初期分類では丁寧体①に分類した）のほうが男性にも女性にもよく使われており、むしろこちらがもっとも中性的な形式として選ばれていると言えよう。

〈命令・依頼〉

前述のとおり依頼形「てよ」「てね」「て」（「行って」「行ってね」「行つてよ」など）は、男女ともに用いる中性的表現として使われている。命令形・禁止形の「なよ」「よ」「な」（「行きなよ」「行けよ」「行きな」「行くな」）、また「行け」のような命令形言い切りは本来女性は用いないとされるものだが、ここでは男性ほどの数ではないにしろ、それぞれ用いられていることが注目される。なお、命令形については本データでは「～てください」という形が男女ともに多く、特に女性では突出している。⁽⁷⁾

〈なの・だよ・なんだ・の↑・ね・じゃない↑・か・て・なよ〉

列記した9種の終助詞は、女性形式とされたものでは女性が、中性・男性形式とされたものでは男性がそれぞれ多く使っているのではあるが、出現数の男女差が20%以内というものである。すなわち多いほうの出現数に対する少ないほうの出現数の割合が80%を越えているものである。この数字は目安にすぎないのではあるが、男性にも女性にもよく使われている、男性形式、女性形式とは意識されていないと考えられる文末形式と言えるだろう。

〈男性文末形式…さ、ぞ・ぜ・な〉

「さ」は「俺すごく頭いいからさ。(232-416)」のようなもので、男性のみに29例用いられている。「ぞ」を含む「N・ナA/だぞ」「V・イA/ぞ」は女性ではそれぞれ1例ずつの出現があるのみである。また女性の「ぜ」使用例はない。男性のほうは「だぞ・ぞ」合計16例、「だぜ・ぜ」5例であった。「だぞ・ぞ」については5人の男性話者が用いているが、うち3人は1例ずつの使用で、残りは2人の話者によって用いられている。4例用いた1人は男子高校の30代の数学教師、残り9例は60代普通科の国語教師が使っている。また「ぜ・だぜ」はこの2人とは別のそれぞれ40代、50代の歴史科教師のみが使っており、いずれも個人のことば癖のようなものも含む限定された使用である。このようなものは男性形式であると言ってよいだろう。女性の「だぞ」「ぞ」使用また女性形式「のよね」の男性1例のみの使用も本データにおいて

はやはり特殊なものである。また、「な」を含む「よな」「だな」「だよな」「(な) んだな」「(な) んだよな」「だろうな」なども男性のみの使用で、女性には1例も現れない。「かな」「V・イA/な」などのように女性が多用する形式もあることはあるが、これは限られた形式であり、「な」は男性的形式と言ってよいだろう。

3. まとめ

以上の考察から、本データに出現する女性文末形式、中性文末形式、男性文末形式を整理、再分類すると次のようになる。

- ① 女性文末形式 N・ナA/よ、だわ、なのよ、わ、 わね、わよね のよ、
のよね、かしら、なの↑ (わ・よ系)
- ② 中性文末形式
もともとは女性形式だったもの N・ナA/ね、なの、なのね、の、のね、
でしょ↑、てよ、てね
もともとは男性形式だったもの だね、だよ、だ、だよ、なんだ、なんだ
よ、なんだね、なんだよね、V・イA (言
い切り)、V・イA/な (あ)、んだ、ん
だよ、んだね、んだよね、なよ
どちらとも言えないもの V・イA/よ、V・イA/ね、V・イA/よね、
の↑、かな、か、言い切り↑、じゃない↑、っ
け↑、て、なさい
- ③ 男性文末形式 さ、だよな、だな、だぞ、だぜ、なんだな、なんだよな、
よな、ぞ、かい、かね、だろう↑、だろうね、だろうな、
命令形/よ、命令形言い切り、命令・禁止/な
(さ・な・だ・だろう・ぞ・ぜ 系)

図6は以上の再分類にしたがって、女性、男性がそれぞれ使用する女性文末形式、中性文末形式、男性文末形式の割合を表したものである。

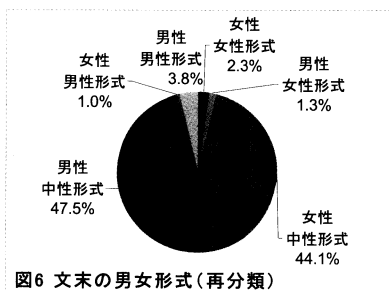


図1～4では常に女性による使用数を超えていた男性による女性文末形式が、ここでははじめて女性によるものより少なくなっている。つまり男性は、女性もよく使うような中性的な形式、いわば見かけ上の女性形式を女性以上によく使って話すが、男性が使うことの少ない、いわば純粋な女性専用形式を用いることは少ないということになる。これは女性話者の場合も同様で、使われている見かけ上の男性形式も多くは中性化したものである。また、いわゆる男性専用形式の使用が、限られた話者による限られたものであることは前述のとおりで、その結果が図6の女性による男性形式の使用1%という数字に表れたわけである。

また図6からは男性が男性的形式を使うよりも、女性が女性的形式を使うことのほうが少ないということもわかる。これは文末形式のみならず、男性的・女性的表現全般にも言えることであることが前掲図1～3などにも見られた。女性があえて女性的な文末を選ばず、男女に偏らない表現をしようとする傾向がここには現れていると言えよう。

4. おわりに

本データはすべて教師の授業における発話ということで、ある意味では特殊な談話である。授業中の教師は、その談話進行を宰領する自由を持つが、同時に生徒に一定の情報を的確に伝える責務も持つ。そのために生徒と一定の距離を保ち比較的丁寧なことばで授業をするという傾向があることを、すでに小林(2007)で指摘した。「ことばの男女差は、普通体やぞんざいな文体ではっきりと現れ」「演説や講演のような硬い話し言葉が使われる場面では、

言葉の上での男女の区別はあまり行われぬ」(益岡・田窪1989:201-203)とされることからすれば、授業の談話に多くの男性専用文末形式、女性専用文末形式が現れないことは当然と言えば当然であろう。

いっぽうで、生徒に的確に情報を伝えるためには親和的な雰囲気や、またときには眠気を催す生徒の気分を引き立て元気をださせるというような働きかけなども行われる必要がある。全体としてはやや丁寧な中性的な表現によって行われることの多い授業の談話の中で、現れる「見かけ」の男女的表現(男・女性的中性表現)もおもにこのような働きを担っていると考えられる。男女ともによく用いている「ね」は丁寧体文末に接続するものも含め発話の親和度を高めていることを、すでに小林(2007:50)で論じたが、女性にもよく使われている「だね」「だよね」など「だ」を用いる文末形式は逆に断定・主張などの強さをもたらす。これらを特に女性的な形式、男性的な形式として意識することなく繰り出すことにより、談話の流れにメリハリをつけ、効果を高めているのである。

言い換えれば、もともとは女性使用形、不使用形と認識されていた文末形式の多くは、すでにそのような性的な自認によって用いられるのではない中性的形式となっているのだが、授業の談話の流れの中では穏やかな親和度や、はっきりとした主張などを示す「見かけ」の男女的表現として効果をもたらしている、ということになるだろう。

注

- (1)レコード数については小林(2008a)では14,226としたが、今回の調査により、先に発話者不明としたものを明らかにする、レコードの区切りの判断を一部変更するなど多少の整理をしたことにより数が変わっている。
- (2)「動詞・イ形容詞/わよ」は女性的な形式とされ、「わ」が落ちた「動詞・イ形容詞/よ」は男性的形式であると従来は言われてきた。言うまでもなく、男性的形式は必ず男性が用い女性的形式は女性が用いるということではない。しかし、「わよ」という終助詞自体が男性にはもちろん女性にもほとんど用いられなくなった現況で、果たして「わ」の落ちた形式は男性的であると言ってよいのかどうか、むしろ性差に偏らない普遍的な形式

ととらえるべきだとも考えられる。また、データ中にみられる男性発話「なんだよ、[名字]、きみ、だいじょうぶなの?」「おい、なんで教科書ないの?」などでは「の」疑問文は女性的表現とされる(益岡・田窪1989:203)が発話全体としては女性的表現とは言えない。女性的文末形式によりやわらげられた男性的表現というべきであろう。ただし、2.1では後述するように、このようなものも「の」の使用をもって「女性的表現」に数えている。

- (3) 男性的表現と分類したもののうちには、名詞・ナ形容詞＝形容動詞(N・ナA)に接続する「だよ」「だね」「なんだ」、問いかけの「かな?」など内観的には男性的表現といえるかどうか疑問があるものも含まれている。これについては、尾崎(1997:34)で助動詞「だ」の不使用を女性形とし、また水本・福盛・高田(2009)でもこれらの形式を女性不使用形としていること、「だ」のない形式が本データにおいても一定の量を現れていることによって、とりあえず男性的表現として分類したのである。また「かな?」については小川(2006:44)の調査により「な」を男性に特徴的な終助詞としてあげていることによった。ただし、動詞・イ形容詞(V・イA)に接続する「わよ」「わね」「わよね」の「わ」が落ちたと考えられる「よ」「ね」「よね」で終わる形式については男性的表現には含めなかった。これは「わ」の使用そのものが少ないことにより、男女に偏らない終助詞として用いられていると見たのである。このことの適否については2.3以後検証していくこととする。

- (4) 用例に付した番号は最初の3桁が協力者である教師の識別番号、ハイフオン以下は各協力者ごとに生徒などの発話を含む全データに付したレコードナンバーである。

- (5) このような発話の流れの例をあげる。50代女性国語教師が男子生徒を相手に漢字書取の答え合わせをしている会話である。(153、188～207)

- 188 教師 五番、収入。
189 生徒 これ間違えたやついる↑
190 教師 これ間違えたやつはもう、バイトなんかやめちまえ、だね。
191 教師 就職なんかすんだよ。
192 教師 いるかしら。
193 教師 あ、これさすができてるじゃん↑
194 教師 できてるじゃん。
195 教師 フッフ(笑)
196 教師 さすがに。
197 教師 さすがに、みんな収入には敏感かしら。

- 198 教師 間違った人がいたら馬鹿にしてやろうかと思ったけど馬鹿にできないじゃん、みんなできてる。
- 199 教師 あれー、珍しいねえ。
- 200 教師 全員ができてるかな、これ。
- 201 生徒 多分できてるよ。
- 202 教師 ところが、ところが反対語はできない。
- 203 教師 反対語はなんですか↑
- 204 生徒 支出
- 205 教師 うん
- 206 生徒 間違えたやついる↑
- 207 教師 いっぱいいるよ。

この談話で教師は下線のとおり多用な文末形式を繰り返して、生徒と親近感のある会話をしようとしている。その中で「かしら」が2度現れる。197にはやや皮肉のような意図が感じられるが、192の場合は手元の答案を見て、自問したような感じである。

(6) 女性と男性の使用量の差について少ないほうの多いほうに対する比率が80%以上あるものについては脱性化・中性化の度合いが高いのではないかということで一応の目安とする。

(7) 本データの命令・依頼表現については刊行予定の『世界をつなぐことば』（仮題・三元社）所収の「授業談話データベースによる実態調査－ジェンダー的視点から見る教師の「命令」－」に詳細する。

参考文献

- 遠藤織枝 (2002) 「男性のことばの文末」現代日本語研究会編『男性のことば・職場編』 pp. 33-45 ひつじ書房
- 小川小百合 (2004) 「話し言葉の男女差：定義・意識・実際」『日本語とジェンダー』 vol. 4 日本語ジェンダー学会 <http://www.soc.nii.ac.jp/gender/>
- 小川小百合 (2006) 「話しことばの終助詞の男女差の実際と意識－日本語教育での活用へ向けて－」日本語ジェンダー学会編『日本語とジェンダー』 pp. 39-52 ひつじ書房
- 尾崎喜光 (1997) 「女性専用の文末形式のいま」現代日本語研究会編『女性のことば・職場編』 pp. 33-58 ひつじ書房

- 小林美恵子 (1993) 「世代と女性語—若い世代のことばの「中性化」について」『日本語学』12-6 pp. 181-192 明治書院
- 小林美恵子 (2003) 「職場における命令・依頼表現—ジェンダー的視点から見る—」『ことば』24号 pp. 13-25 現代日本語研究会
- 小林美恵子 (2007) 「授業談話データベースによる実態調査—授業の発話の丁寧度について」『ことば』28号 pp. 41-52 現代日本語研究会
- 小林美恵子 (2008a) 「授業談話データベースによる実態調査—教師は生徒をどう呼ぶか—」『ことば』29号 pp. 54-62 現代日本語研究会
- 小林美恵子 (2008b) 「授業談話データベースによる実態調査—授業の構成要素と丁寧度」『東京都立国際高等学校研究紀要』11号 pp. 80-89
- 鈴木睦 (1993) 「女性語の本質—丁寧さ、発話行為の視点から—」『日本語学』12-6 pp. 148-155 明治書院
- 因京子 (2006) 「談話ストラテジーとしてのジェンダー表示形式」日本語ジェンダー学会編『日本語とジェンダー』pp. 53-72 ひつじ書房
- 中島悦子 (1997) 「疑問表現の様相」現代日本語研究会編『女性のことば・職場編』pp. 59-82 ひつじ書房
- マグローイン・花岡直美 (1993) 「終助詞」『日本語学』12-6 pp. 120-124 明治書院
- 益田隆志・田窪行則 (1989) 基礎日本語文法 くろしお出版
- 三井昭子 (1992) 「話し言葉の世代差—終助詞と副詞を中心に」『ことば』13号 pp. 98-104 現代日本語研究会
- 水本光美 (2005) 「テレビドラマにおける女性言葉とジェンダーフィルター—文末詞（終助詞）使用実態調査の中間報告より—」『日本語とジェンダー』vol. 5 日本語ジェンダー学会 <http://wwwsoc.nii.ac.jp/gender/>
- 水本光美・福盛壽賀子・高田恭子 (2009) 「日本語教材に見る女性文末詞—実社会における使用意識調査との比較分析—」『日本語とジェンダー』vol. 9 日本語ジェンダー学会 <http://wwwsoc.nii.ac.jp/gender/>

(こばやし みえこ)